

# 日本芸能の醍醐味堪能

## 附属函館中で文化庁学校巡回公演

### 狂言の舞台鑑賞や実演指導

【函館発】文化庁の学校巡回公演事業・児童生徒が作り上げる狂言教室「葺くさびら」が18日、道教育

大学附属函館中学校（中村吉秀校長）で行われた。全校生徒305人がプロの狂言師の舞台鑑賞や実演指導などを通して、伝統ある日本芸能の醍醐味を味わった。

の育成など優れた文化芸術の創造を目的としている。

教室では和泉流狂言三宅狂言会の狂言師が講師を務め、伝統芸能の歴史や能舞台の仕組み、演出方法について解説。室町時代に完成した狂言は、能と同じ舞台上で演じられていること、30分前後の短い劇であることなどの特徴を説明した。

本格的な文化芸術に触れてもらおうと、文化庁が希望のあった全国の小・中学校で実施しているもの。創造力や思考力、コミュニケーション能力などを養い、将来の芸術家や観客層

「動物の鳴き声などもせりふで伝える喜劇は人間のありのままの姿を面白おかしく伝える」とし、狂言独特の演出方法について実演を交えながら紹介。生徒はイヌやサルなどの

鳴きまねを取り入れた狂言「盆山」を鑑賞後、狂言体験に挑戦。基本所作や狂言の発声練習として謡を語るなど稽古の一端に触れた。

事前に狂言師から実演指導を受けた12人の生徒が舞台上に立つ場面も。当日は増

え続けるキノコを退治しようとした山伏がキノコの逆襲に遭う狂言「葺」を実演した。

出演した生徒の柴田滉矢さん（3年）は「プロの狂言師の方と同じ指導をしてもうえたことが、中学生も対等に接してもらえた」という自信につながった。同時に、舞台上立つ使命感が伝統を継承している要因の一つだと感じた。齊藤旅詞さん（3年）は「狂言や能、歌舞伎などを知識として学ぶことにはあるが、初めての経験に喜びを感じて出演した。狂言師の方の何気ないしぐさや座り方などの大変さについて学ぶことができた」と貴重な経験を振り返った。



12人の代表生徒が狂言を演じた